

# 〈政治的なもの〉への「適切な距離」をめぐる

——新自由主義とオルタナティブ構想——

大井 赤 亥

## はじめに

森政稔『〈政治的なもの〉の遍歴と帰結』（2014年）は、1980年代末から現代にいたる既発表論文をまとめた論文集であると同時に、〈政治的なもの〉という関心に依拠して20世紀の思想史を捉え返す、いわば「問題史」ともいえる著作である。

著者の議論の特徴は、思想史をめぐる博覧強記な知見を基に、豊饒で多種多様な問題提起を展開し、それによってありきたりの「通念」や「見取り図」を揺さぶり続ける点にある。そして本書もまた、そのような著者ならではの視角と問題提起に満ちており、それらが向けられるテーマも多岐にわたる。

しかしそのなかでも、2008年金融危機以降の新自由主義の現状を受けて執筆された「第9章」、および〈政治的なもの〉をめぐる議論の変遷とその帰結を論じた「第0章」と「結語」が著者の直近の関心を反映しており、したがって本稿も、著者のこの関心に重ねて、〈政治的なもの〉と新自由主義との関係に限定して論じることにした。

本稿では、第一に、本書の紹介もかね、著者による〈政治的なもの〉の捉え方を確認し、1980年代以降の新自由主義的統治と〈政治的なもの〉との交錯について概観したい。そして第二に、それを踏まえ、20世紀における統治性の変遷、および新自由主義的統治を克服するオルタナティブ構想と〈政治的なもの〉とのありうべき関係について、評者（大井）自身の考察を

展開したい。

## 1. 〈政治的なもの〉をめぐる議論の変遷

著者によれば、「政治的なもの (the political)」とは、『政治学思想系』のひとつとの研究を方向付けている関心（森[2014: 10]）であり、そのアイデンティティのようなものである。それゆえ、〈政治的なもの〉に対する興味や期待は、「政治を他の領域から区別された自律的な営みとして確立したい、という願望」（森[2014: 27]）とも重なっている。

そして、第二次大戦後における〈政治的なもの〉の端緒は、全体主義という痛烈な体験を経て、それに抗する形で生じる。具体的にはアレントやシュトラウスなど、ドイツからアメリカへの亡命知識人による仕事であり、これらの論者は1950年代のアメリカにおいては依然「マージナルな存在」であったものの、「この時期は、後に広く〈政治的なもの〉が論じられるさいの原点となる著作が書かれた時代」（森[2014: 40]）であった。

1960年代になると、アメリカでのベトナム反戦運動、パリの五月革命などに代表されるニューレフトが登場し、このようなラディカルな社会運動の登場は、〈政治的なもの〉をめぐる議論を促すことになる。この時代に〈政治的なもの〉をめぐる議論を確立したのは、ウォーリンの『政治とヴィジョン』（1960年）であった。1980年代に大学院に入った著者の世代にとって、ウォーリンは冷戦終焉に前後して能動的な政治

のヴィジョンの可能性を示す存在であり、〈政治的なもの〉が論じられる際にそこに戻って来ざるをえない「発端の位置を占める思想家」でもあった。

しかしながら、1968年の文化変容によって勝利したのは、サッチャーやレーガンなど新しいタイプの保守主義であった。そして、〈政治的なもの〉の語りは、「保守革命」以降、新自由主義と結合し、主としてその秩序再編のためにリーダーシップや決断と結びついて流布される。本来、左右対立を超克して政治のヴィジョンを示す可能性を孕んだ〈政治的なもの〉は、皮肉なことに、新自由主義と結合するという「予期せざる帰結」を招き込むことになったのである。

その後、2008年の金融危機を経て新自由主義的な統治性も失速し、新自由主義からの転換と〈社会的なもの〉の復活が求められ、それを受ける形でアメリカのオバマ政権や日本の民主党政権が生じる。しかしながら、これらの政府は、「ケインズ主義的な古い経済管理術への復帰と、失敗したばかりの新自由主義的統治への依存とのあいだで、さまよったまま」(森[2014: 350])、新たな展望を構想していない。

このような現状を前に、著者は、新自由主義と〈政治的なもの〉との結合に対する批判的再考を促す。すなわち、国家を批判して自由の領域である市場を擁護する新自由主義と、市場を決定論的なメカニズムと捉えてそのような桎梏からの人間の自由の解放を目指す〈政治的なもの〉とは、本来相容れないものであり、この両者の結合が不具合をきたしている点に、現在の政治をめぐる混迷の要因が求められる。その上で本書は、このような「皮肉な帰結」を前にしてなお、「今後も〈政治的なもの〉の可能性を、これまでとは別の形で考えてゆきたい」(森[2014: 358])という著者の言葉で閉じられている。

本書を読んで評者が最初に感じたのは、本書

に収録された諸論文が、時代状況は別々に書かれながらも、振り返れば〈政治的なもの〉という軸から20世紀思想史を通貫して論じる稀有な「問題史」となっているという印象である。本書に取り組むことは、評者にとっても、著者の思考スタイルを内在的に迫るための意義深い機会となった。

他方、評者にとって興味深く、また同時に問題含みと感じたのは、20世紀後半における〈政治的なもの〉の現れ方である。元来、20世紀前半における〈政治的なもの〉は、それを非常時の決断に求めたシュミットにせよ、経済に対する政治の優位を実践したレーニンにせよ、いわば「左右」を超克した形で現われていた(森[2014: 150-1])。しかし、20世紀後半における〈政治的なもの〉は、民衆による権力の構成的契機を重視しつつ、理論的には「左右」を超克する豊饒さを孕みながらも、現実政治においてはもっぱら「福祉国家批判」として自身の姿を確認したように読める。

その背景には、著者も指摘する通り、ウォーリンやアレントに示された〈政治的なもの〉の復権は、総じて、人間の生理的必然性、「物質主義」、〈社会的なもの〉に対しては無関心であった点が想起されよう。〈政治的なもの〉は、「モノの管理の術」に墮した行政国家や、食わせてやるから口出すな式の官僚支配に抗って復権されるべきものであったと思える。

しかしながら、1980年代以降の政治変容のなかで、〈政治的なもの〉は新自由主義と皮肉な共振を果たしていく。そして2000年代以降、先進国での貧困や格差が再び顕在化し、現実政治の課題が「物質主義への回帰」を見せるにつれ、〈社会的なもの〉への批判を通して自らのレゾナートルを確立させようとした議論は、その時代的な有効性を希薄化させていく。

2000年代に大学院に入った評者のような立場から見れば、福祉国家批判による〈政治的なもの

の〉の復興というウォーリンの試みは、盤石な福祉国家体制が安定的な統治を供給していた古き良き時代の贅沢な議論というようにも聞こえる。あるいは、統治が安定していたからこそ、政治思想という学問の世界からそれに対するラディカルな批判を行う余裕があった、ともいえるようか。

ここにおいて、1980年代にはウォーリンの「ヴィジョン」に一定の肯定的関心を寄せていた著者の立場も、その後、新自由主義的統治による弊害が顕在化するにつれ、2000年代以降はむしろ〈社会的なもの〉の擁護や復権を重視するスタンスへと軸足を移したようにも読み取れる。とはいえ、著者においても、おそらく独自の謙抑性を含みながらも、今なお〈政治的なもの〉が持つ意義が完全に否定されたわけでもない。

そのような本書の論旨からは、20世紀後半における〈政治的なもの〉の功罪を見極めようとする視点を強く窺うことができる。そして、評者が本書から受けとめた問いは、〈政治的なもの〉への期待とはいかにあるべきなのか／あるべきでないのか、〈政治的なもの〉に対する「適切な距離」とはいかなるものであり、常に変動する政治状況において、その距離感を「保ち直し続ける」ためにはどうするべきなのか、というような課題であった。

## II. 20世紀における統治性の変遷

### II.1. 「社民／リベラル・コンセンサス」

本節では、著者の議論に重ねる形で、20世紀の英米圏における統治の変遷について、評者なりの概観を提示してみたい。

20世紀の英米圏の政治体制を振り返った時、およそ1930年代から1980年代まで、国家は基本的には完全雇用、経済成長、市民福祉のための機関として使用されており、そこには統治をめぐる一定のコンセンサスを指摘することができ

る。

たとえば1930年代アメリカのニューディール政策は、政府による公共事業や購買力強化を通して大恐慌の打撃を受けた人々を包摂し、体制への信頼回復を図るものであった。そして最近の研究では、1950年代の共和党政権も、政府による福祉政策が共産主義に対する最大の防護壁であるという理由から、むしろニューディールの課題を継承したことが示されている<sup>(1)</sup>。1930年代に形成された政治枠組は、20世紀のアメリカにおいて、民主共和の境界を越えて埋め込まれた「リベラル・コンセンサス」となったといえる。

同様の変化は、1945年のアトリー政権を契機に、イギリスでも生じる。アトリー政権は戦時中の経済統制を戦後も継続させ、ケインズ政策に基づく需要創出とベヴァレッジ報告に依拠した社会保障整備を進める。興味深いのは、ケインズもベヴァレッジも自由党員であったことであろう。20世紀初頭の「ニューリベラリズム」以来の自由党の政策は、いわば労働党によって代替的に実現され、自由党の衰退はむしろその政策がイギリス政治の「前提」となったことを示している。アトリー政権の政策はその後の保守党政権にも踏襲され、1950年代には保守党のバトラーと労働党のガイツケルの経済政策の親近性を表す「バッケリズム」なる造語が流行し、「合意の政治 (consensus politics)」が形成される。

20世紀中旬の欧米を画したこのような安定的統治性について、それを表す言葉は、「社会民主主義的合意」(ダーレンドルフ)、「埋め込まれた自由主義」(ポランニー)、「相対的に安定した国家独占資本主義」(マルクス主義)など多様だが、基本的には政府による社会保障と雇用創出を中心とした「社民／リベラル・コンセンサス」を意味するものといえよう。共産主義の盛衰に即してロシア革命からソ連崩壊までを

「短い20世紀」としたホブズボームに倣えば、「社民／リベラル・コンセンサス」の盛衰に着目して、1930年代から1980年代の50年間を「もっと短い20世紀」と名づけることも可能かもしれない。

## II.2. 「新自由主義的な意味での30年間」

周知のように、1970年代、先進諸国での失業率とインフレ率の慢性的上昇を背景に、福祉国家は翳りを見せていく。それと並行して、当初は「周辺の」な位置にあったハイエクやフリードマンなど新自由主義のイデオロギーが次第にエスタブリッシュメントに受容されるにいたる。

サッチャー政権は、その経済イデオロギーにおいてこれらの思想を「採用」し、ケインズ主義の放棄とマネタリズムに基づいたサプライサイド的解決が追求される。ハーヴェイによれば、新自由主義とは、ニューディール以降は陰に隠れていた経済エリート、企業家、金融資本家、CEOや法律部門のリーダーたちによる「権力回復のための政治的プロジェクト」であった(Harvey [2007: 32-48])。そして、1980年代の英米で生まれた新自由主義的な統治は、90年代以降、IMFや世界銀行を通じて各国に「輸出」される。

サッチャーが自身の政治的遺産を問われて「トニー・ブレアとニューレイバー」と応えたように、新自由主義の成功を如実に物語るのは、クリントンやブレアなどその後の「中道(左派)政権」もまた踏襲せざるをえない様々な制約の網の目をはった点であった。「新自由主義時代の中道(左派)政権」は、社会の統合と包摂への配慮を示しながらも、基本的にはサッチャーやレーガンの設定した枠組の内部で政策を選択するものであった。

このようにして、「新自由主義な意味での30年間」(ハーヴェイ)は、たしかに一定の統治性を確立してきた。同時に、その趨勢は現在混

迷のなかにある。新自由主義は2008年金融危機で「終焉」したといえるのか。オバマ政権の登場は新自由主義からの転換として位置づけられるのか。評者もそのような問いを強く抱きながらも、新自由主義を過去のものとする「ミネルヴァの梟」を飛ばすには、まだ少し陽が明るすぎるようにも感じる。

## III. オルタナティブと〈政治的なもの〉

### III.1. 歴史的参照点としてのニューディール

最後に、新自由主義の統治に翳りが見えている現在において、それに対するオルタナティブ構想と〈政治的なもの〉との関係を考えてみたい。

著者の議論には、〈政治的なもの〉に対する一貫した関心と議論整理があり、それが本書を稀有な「問題史」にしている。同時に、〈政治的なもの〉という概念の抽象性と、それに対する著者の距離感の複雑さが、本書の読解に独得の困難を与えている。「〇〇的なもの」という表現をあえて開いたまま使用することによって可能になるイメージの豊饒さと同時に、各人の問題意識にしたがって「〇〇的なもの」の外延を少しずつ絞り込む作業も必要だろう。

ここで、評者にとっての〈政治的なもの〉について具体的な像を示しておきたい。評者にとって「政治」とは、民衆の圧力や運動が議会や行政を動かし、歴史的に蓄積された制度や経済構造を統御、変容させていく試みとして意識されることが多く、〈政治的なもの〉はそのような「政治」と深く関わるものと思える。

では、新自由主義に代わる新たなオルタナティブ構想と〈政治的なもの〉とは、どのような関係にあるだろうか。その際に興味深いのは、現代アメリカの批判主義的な研究者が、依然としてニューディールのなかにオルタナティブへの歴史的インスピレーションを求めていることである。たとえばアメリカの20世紀史を描いた

P・カズニックは、アメリカ例外主義を厳しく批判しながら、ルーズヴェルト政権の副大統領で、ニューディールの農政を牽引したH・ウォレスを高く評価し、そのヴィジョンに希望を託している (Stone & Kuzmick [2013])。

同様の姿勢はD・ハーヴェイにも見られ、ハーヴェイは現在のアメリカ政治を支配する「企業家的自由概念」に対してルーズヴェルトの「四つの自由」を対峙させ、次のように述べる。「ルーズヴェルトの議論はその〔オルタナティブ構想の〕出発点の一つである。国家機構に対する民衆のコントロールを再獲得し、それによって、市場の権力という巨大なジャガーノートのもとにある民主主義的な実践と価値観を——空洞化するのではなく——より深く推進するための同盟が、アメリカ内部で構築されなければならない」(Harvey [2007: 284]、挿入引用者)。

そして、このようなニューディールの政治は、不況からの脱出を政治に託した民衆、「青鷲」に代表された運動圧力、強化された大統領権限、そして敵対関係を巧みに演出し、異なる勢力を共通の政治目的のために統合させるルーズヴェルトの「実践知」によって可能になったものであり、いわば、評者の定義する〈政治的なもの〉が発揮された好例といえよう。ニューディールが今なお、「ポスト新自由主義」の体制を模索する上で参照されるべき遺産であるとすれば、そのようなオルタナティブ構想と〈政治的なもの〉とは、決して無縁とはいえないだろう。

### III.2. 現代的萌芽としての左派ポピュリズム

では、オルタナティブ構想への手がかりはどこに見いだされるだろうか。最後に、そのような構想の一つの現代的萌芽として、ギリシアのシリザに代表される、南欧での左派ポピュリズムによる政治変動について触れておきたい。

ギリシアのシリザは、元来、ユーロコミュニズムの流れを汲みながら、社民、環境運動、毛

沢東主義など様々な勢力を糾合した連合であったが、2000年代以降、年金と社会保障の擁護を掲げて台頭。2015年には反緊縮を掲げて政権を獲得するにいたる。

このようなシリザの勝利に、〈政治的なもの〉と新自由主義への抵抗との結びつきを指摘することも可能であろう。すなわち、シリザを支える民衆的支持の背景には、ドイツを中心とするEUに対してギリシアの主権と尊厳の維持を図るナショナリズムの圧力とともに、ブリュッセルのEU官僚に対して民衆支持に依拠したギリシア政府が抵抗するという「政治」の契機、そして緊縮財政を押しつけるEUやIMFに対して反緊縮と反新自由主義を掲げるシリザが対峙するという「ポスト新自由主義」の契機を窺うことができるからである。

もとより、これら左派ポピュリズムの動きは現在進行形であり、その推移は予断を許さない。またこのような南欧の政治変動を、英米や日本でのオルタナティブ構想の「モデル」として安易に「輸入」しようとするのも拙速といえよう。しかし、これらの変動には、いわば、〈政治的なもの〉の再稼動によって〈社会的なもの〉の再構築を目指すという方向性を読み込むことも可能ではないだろうか。

### 結論

上述のように、新自由主義に代わるオルタナティブを構想する上で、ニューディールの遺産と左派ポピュリズムの政治変動は、それぞれ、歴史的参照点と現代的可能性とを示している。

しかしながら、もちろん、ルーズヴェルトの成功物語に憧れて昔懐かしの「リベラル・コンセンサス」にノスタルジックに回帰すればよいわけではない。ケインズ主義への「揺れ戻し」だけでは、現在の「システム」の危機への対応としては不十分であることは、すでに広く指摘されている (三宅他 [2014: 16])。また、シリザ

のような左派ポピュリズムの動きは現在進行形であり、その推移は予断を許さず、それらが直ちに新たな統治の姿を示す現実的選択肢になるというわけでもない。

それゆえ、新自由主義の混迷と変容のなかで、今求められる態度は、おそらくひどく折衷的で地味なものであろう。すなわち、一方でいかに時代遅れといえども当座「リベラル・コンセンサス」の維持や修復を図りながら、同時に、左派ポピュリズムの新たな政治変動のなかにオル

タナティブ構想の萌芽を読み取ろうとする、両睨みの姿勢が求められているといえよう。

ここで再び浮上するのは、それらオルタナティブ構想を模索する上で、われわれが〈政治的なもの〉に対していかなる態度を選択するか、という問いである。〈政治的なもの〉への期待が予期せぬ「皮肉な結果」を招かぬよう、それとの「適切な距離」を見定める上で、本書はその独特の視点を通じて、深く重い洞察を投げかけているように思える。

## 註

1. このような研究として、Delton, Jennifer (2013) *Rethinking the 1950s: How Anticommunism and the Cold War Made American Liberal*, New York: Cambridge University Pressを参照。

## 文献

森政稔 (2014) 『〈政治的なもの〉の遍歴と帰結』 青土社。

三宅芳夫・菊池恵介(編) (2014) 『近代世界システムと新自由主義グローバリズム—資本主義は持続可能か?』 作品社。

Delton, Jennifer (2013) *Rethinking the 1950s: How Anticommunism and the Cold War Made American Liberal*, New York: Cambridge University Press.

Harvey, David (2005) *A Brief History of Neoliberalism*, Oxford: Oxford University Press. = (2007) 渡辺治 (監訳) 『新自由主義—その歴史的展開と現在』 作品社。

Stone, Oliver and Peter, Kuznick (2013) *The Untold History of the United States*, Ebury Press. = (2013) 太田直子 (訳) 『オリバー・ストーンが語る もうひとつのアメリカ史』 早川書房。